平成23年度高経研冬期フォーラム基調講演

「道立中等教育学校の創造～愛あふれる北の大地で夢をもつ人を育む～」

北海道立教育研究所副所長　大山　節夫　氏

おはようございます。

ご紹介いただきました大山でございます。今日はなるべく肩の凝らない話をしたいと思います。

北海道登別明日中等教育学校は、平成１９年４月に開校式を迎えました。小学校を卒業した生徒からなる前期課程８０名と、中学校を卒業した生徒からなる後期課程８１名の総計１６１名、保護者が４００名以上、マスコミ関係者多数、来賓１００名の計７００名以上の方々を前にしての開校式でした。

明日中等の校歌は、ご存知の通り大黒摩季さんにお願いしました。まともに作っていただいたら１曲数百万円するそうです。２曲作ってもらいましたので合わせて５００万円くらいだそうです。それが無料です。この校歌披露をセレモニーの最後に持ってきたわけです。開校式に出席の皆さんは、校歌が大黒摩季さんの作詞作曲とは知っておりましたが、式典に本人が実際に来ていただいていることは知りません。TV 放映の関係がありましたから、マスコミの方々には事前に連絡しておきましたけれども、あくまでも内緒の話ということでした。

式典の最後になり、校歌披露に式次第が移ったとき、司会の後藤教頭（現遠軽高校長）が「それでは校歌の披露に移ります。ご存知のとおり作詞作曲は大黒摩季さんです。それでは、大黒摩季さん、どうぞ」とやったものだからもう大変、会場がドヒャーという叫び声とともに沸いたわけです。

これが全国放映となり、その後、２～３週間、全国からたくさんの電話をいただきました。内容は、明日中等はどのようなカリキュラムを組んでいるのか、学校の特色は何かといったものではなく、どうしたら大黒摩季さんに校歌を作ってもらえるかというものがほとんどでした。ある県などは、教育委員会のトップの方が直々に電話を入れてきたものですから、わたしもびっくりした次第です。

現在、中高一貫教育校は、全国に４２０校程度あるようです。その中でも一体型の中等教育学校は４９校だそうです。平成１９年度の時点で登別明日中等教育学校は全国で１６番目、都道府県別に見ると１県で複数校設置していた県がありましたので９番目ということでした。４７都道府県でベスト１０に入ったわけですから、北海道教育委員会としても力を入れていたことになります。

そもそも北海道教育委員会が道立中等教育学校を設立すると具体的に表現したのは、平成１２年６月に出された「公立高等学校配置の基本指針と見通し」の中に、「連携型中高一貫校の実績を踏まえながら、モデルとなる中等教育学校を設置できるよう検討する」と記載したのが最初でした。「設置できるかどうかを検討する」ではなく、「設置できるよう検討する」という表現に、設置を前提とした北海道教育委員会の強い意志が表れているわけです。

また、平成１２年にこのような表現をしたということは、この数年前から検討がなされていたことになります。実際には平成１９年の開校ですから、この学校は、要は１０年間の準備を経て開校したということになるわけです。この間、わたしは中等教育学校の設立準備における３つのステージに関わってきましたけれども、しかしながら、もっとたくさんの大先輩が先の準備過程に関わっていらっしゃるわけでありますから、学校づくりを進める中では、そういった方々の強い想いもしっかりと受け止めなければいけないと絶えず肝に銘じていたつもりです。

設置の目的は、選択幅の拡大や生徒一人一人の個性を一層重視するといった一般論もありましたけれども、全道的に義務教育の教員を集めるという作業が関わってきますから、前期課程の教員である中学校の先生も後期課程の教員である高校の先生もこの学校でしっかり育ってもらい、その後異動して全道の学校で実践してもらいたいという思い、すなわち生徒を育てる側面と先生を育てる側面を持っているのがこの学校の役割だと考えておりました。

さて、わたしはこの学校の設立の３つの段階に関わったと言いましたが、最初は平成１４年度の本庁政策室時代の財政対応の仕事でありました。２度目は平成１７年度本庁高校教育課中等教育学校グループの主幹という立場、そして３度目は平成１８年度開校準備事務室での対応を経て平成１９年度の開校に至ったわけです。これからは、それらの場面ごとに裏話なども交えながら紹介していきたいと思います。

まず平成１３年度、１４年度の政策室時代の話であります。このときの他の思い出深い仕事としては、平成１５年度からの民間人校長の登用を控えて、先進的な導入県であった広島県へ視察に行って報告書をまとめたことなどが挙げられます。また、ここで行っていた新しいタイプの学校づくりに関する仕事では、総合学科の設置や全日制普通科単位制の導入といったこともありました。全日制への単位制の導入については、設置の基準策定に関わっております。そのスタンスは、郡部においては、再編統合を見据えた導入であり、都市部においては、その管内、地域の２番手校ないし２番手校的な学校に導入するというものです。具体的には、郡部の学校としては砂川高校と江差高校、都市部としては釧路江南高校と札幌手稲高校の各２校でありました。これらの学校について、当時の校長先生や教頭先生と協議を進めながら、平成１６年度・１７年度の導入に向けて準備を進めていったわけです。

平成１４年度の大きなもう一つの仕事が、中等教育学校の設立準備でありました。財政対応だったと先ほど申しましたが、要するに北海道の財政課へ出向き、当時の計画では４２億円という金額で中等教育学校を作りたいのでその予算を措置してほしいということを交渉する担当者だったということです。今ほどではありませんが、当時も北海道の財政は非常に厳しい状況に変わりはなく、最初はこちらの話にまともに付き合ってくれるような状況ではありませんでした。この仕事は、事前準備に約３ヶ月、実際の財政対応は延べ９回で２ヶ月掛かりましたので、その後のまとめなども入れますと、およそ半年間の仕事となりました。ほとんど寝る時間を削っての厳しい仕事でしたね。また北海道での初めての学校ということもあり、道議会での対応にも神経を使いました。

さて財政対応の話に戻りますが、構想としては、学校規模が２間口、教育の柱が英語を中心とした国際理解教育、また定員の２０％を寄宿舎生として募集とするというものでした。これを財政課に話したところ、そんな計画は中途半端だと一蹴するんです。宮崎県五ヶ瀬中等教育学校を見てみろ、あそこは１間口で全寮制だ、それぐらいの気概があなたのペーパーからは感じられないというのです。しまいには、北海道教育委員会の持ってくる計画はどれもこれも中途半端で本気でやる気があるのかと言われる始末です。これにハイそうですかというわけには勿論いきません。そこでいろいろと説明するわけですね。例えば、五ヶ瀬中等教育学校のような１間口校では、一般的には弾力的な教育課程の編成が不可能であり、それができているのは県独自で十数名の加配教員を措置しているからであることや、国からの特別の支援があることなどを資料を使

って説明するのです。登別明日中等教育学校の学校規模を２間口にすることは、要は４間口規模の高校と同じような標準法による教員数の配置がなされるわけであり、結果的に弾力的な教育課程の編成が可能となる最低ラインの教員数を確保することができるなど、財政的に厳しい北海道の状況を考えた上でのベストな選択であると丁寧に説明をしました。そんなこんなで少しずつ折り合いをつけていくわけですね。

もう一つ、気を使った例をあげますと、寄宿舎設置の問題です。かねがね北海道教育委員会は家庭教育の重視を強調しておりましたので、中等教育学校に寄宿舎を設置した場合、特に義務教育の段階ではこの精神に抵触するのではないかという意見が上がっていたのです。また、一方で、本道で１校の設置ですので、全ての児童生徒に受験機会を与えなければならないという問題もあります。これらへの対応としては、「本道１校のため全道枠を設け寄宿舎も設置するが、家庭教育の大切さも認識してその規模は大きなものとはせず、家庭と十分連携を図ることのできる範囲とし、受け入れ態勢を整備する」という表現でまとめました。そして、通学時間から通学生なのか寄宿舎生なのかを判断することとしたわけです。

最終的には、９回目の財政対応が終わった時に財政課の担当官が、「大山さん分かりました、上司と相談するので２週間程時間をください。２週間後に結果を連絡します」と言ってくれたわけです。そして約束の２週間が過ぎたある日、その担当官から、今夕結果を伝えに政策室に出向くので待っていてほしいとの連絡を受けました。約束の時間に上司とわたしが待っている政策室へ担当官が来訪し、中等教育学校設置の計画を認めると回答してくれたのです。お礼を述べ自席に戻りましたら涙がポロポロこぼれてきました。まさか、このようなデスクワークで涙が出るとは思ってもおりませんでした。それだけわたしにとっては辛い仕事だったと言えると思います。その時の泣いている姿を斜め向かいの後輩に見られてしまい恥ずかしく思いましたが今となってはよい思い出です。

その後、部署が変わり、翌１５年度は生徒指導の担当、１６年度は胆振教育局勤務となりまして、自分は中等教育学校とはすっかり縁が切れたなと思っていたのですが、１７年度本庁高校教育課に中等教育学校グループを設置することになり、そこの主幹として赴任するように命ぜられたわけです。わたしにとっては意外な人事で驚いたのですが、その時、ひょっとしたらこのまま翌年には中等学校教育開設準備室へ異動となり、その後校長として学校づくりをする

ことになるのではないかと思ったわけです。実際にそうなったのですが、こんなことになるんだったらイマージョンプログラムみたいな面倒なことは止めておけばよかったと思った次第です。まあ、今のは余談ですが・・・（笑）

さて、それまでの準備段階である最初のステージでは財政対応や道議会対策といった内部のための作業が中心でしたが、２つ目のステージである本庁高校教育課での勤務は、北海道教育委員会が初めて設置する道立中等教育学校を外部の方々へ広報するという仕事が中心となります。中等教育学校の基本構想である学校規模や設置場所、また教育課程の柱や教育活動の概要等について正式に発表していきました。校名を決定したり、リーフレットを作成して全道１４支庁管内をまわって説明会を開いたのもこの年でありました。加えて、道内では初めてのタイプの学校でしたので、学則や教務規定などについても、様々な方の協力をいただき、作成整備した年でもありました。

もう一つの大きな仕事に、冒頭にこの学校の役割として教員の人材育成があるとお話ししましたが、最初の学校を支える教員をどのように集めるかということがありました。その方策として、全道で初めて教員の公募制導入を決定したのもこの年でした。実際に翌１８年度からこの制度を使って教員の公募を行いましたが、その運用はなかなか難しいものだということが分かりました。特に各教科をバランスよく集めることは難しいですね。どうしても偏りが出て来てしまう。また、公募の中には、現在の職場の人間関係が行き詰まっているため心機一転を図りたい、健康に不安があるので空気のよいところで勤務したいなどといった本来の目的とは異なる観点で応募してきた先生もおりました。

またこんなこともありました。ある学校に来て欲しい先生がいたので、校長先生に連絡をし、手を上げていただくようお願いできものかとお願いをしたわけですが、「大山さん、あなたが欲しい人材は本校にとっても必要な人材なんだよ」と切り返されるのです。そうですよね、自分がその校長先生の立場なら同じことを言うと思います。人材は溢れているわけではないんですね。わたしも最後には、校長先生に事前に告げずに先生にダイレクトに連絡を取って応募を勧めるなど、やや強引な手段に走ったりしました。もちろん、公募ですから、受かるかどうかは分からないということが前提なんですが、とにかく、手を上げなければ受かるチャンスもないと言うことです。これは、当然いやがられるやり方でありまして、わたしはあの当時全道で一番校長先生方から嫌われていたのではないかと思います。ただ背に腹は代えられなかったですし、それだけ

の覚悟を持ってやってもおりました。

校名もこの年に決めました。全道２４市町村から１１９点の応募がありました。カルルス中等教育学校、アンドロメダ中等教育学校というのもありましたね。また登別でノーベル賞を取るような子どもを育ててほしいという願いを込めてノーブル別中等教育学校というのもありました（笑）。辛い仕事が多かった中でこれは唯一潤いのある仕事だったですね。

校名の「明日（あけび）」に関わる話をします。公募の中にあった「明日」が候補の筆頭になっていくのですが、それまでにこの「明日」の表記について徹底的に調べました。校名ですからね、変な意味合いがあると困るんですね。様々な古典にあたりましたが、「明日（あした）」と書いて「あけび」と読ませるものはありませんでした。そこで今度は全国の地名や校名をあたったところ、２ヶ所「明日（あけび）」の地名がありましたね。富山県と愛媛県です。富山県には黒部市宇奈月町明日という地名があるんですね。この「明日」の由来を確認するために、富山大学の民俗学の教授や、地元に代々伝わるお寺の住職に突然電話を掛けて地名の由来を尋ねたりと夢中で調べていきました。そうこうしているうちに、とてもおもしろいことに気づいたのです。それは愛媛県の「明日城（あけびじょう）」の件です。こちらは瀬戸内海の小さな島にあった城跡なんですが、当時、瀬戸内海を荒らした海賊から神社を守るため、四方に城壁が作られたそうで、その北の守りが「明日城」だったんです。この北の守りということにも縁を感じたところでしたが、実はこの後ろに控えている神社がすごいんです。全国に１万程点在する三島神社の総本山にあたる由緒ある社であり、国宝または国宝級の刀剣や甲冑類が多数奉納されております。この神社の名前が何と大山神社というのです。正式には大山祇（おおやまづみ）神社というのですけれども、大山神社です。「ああ、明日は大山を守ってくれるんだ」と思ったものでした。本当に不思議な縁を感じましたね。当時の道教委のある幹部の方が、大山の奥さんの名前が「あけみ」だから「あけび」にしたのではないかと冷やかされましたが、純粋に「明日（あした）」と書いて「明日（あけび）」と読むこの表現が、響きにしてもイメージにしても素晴らしいものがあったので校名として採用したのです。

また平成１７年度は真新しいリーフレットを持って全道１４支庁管内を行脚し、説明会を行った年でもありました。ただ、説明会では参加者のほとんどが反対勢力の方々ばかりでしたね。この財政難に４０億円もかけるなんて間違っ

ているという論法が中心でした。また道内各地が少子化ですから、一人でも多くの子どもたちを地域内で確保したいという状況なわけです。中には町のトップの方が登別明日中等の宣伝を地域ではするなと指示を出したという話なども入ってまいりました。

全道行脚の結果、設置に反対する方の動きだけが目立ち、登別明日中等教育学校に子どもを入れたいという声が少ないことを実感しました。このままだと入学生が集まらないという強い危機感をわたしたちが持ち始めたわけです。そのため、何かアドバルーンを揚げる必要があると感じたわけです。じゃ、有名人に校歌でも作ってもらおうかという話がここで出て来たのです。誰がいいのかとみんなで話し合いましたよ。とりあえず、できるできないは別として、上げるだけ上げてみようと言うことで、中島みゆきさん、松山千春さん、ドリカムさんや玉置浩二さんなんかも勝手に候補に上げましたね。最終的には入学生の保護者の世代に近い大黒摩季さんに落ち着いたわけです。大黒摩季さんは「熱くなれ」というアトランタオリンピックのテーマ曲となった素晴らしい歌を作っておりまして、あの曲のように夢や愛といったフレーズが出てくるバラード調の校歌を作ってほしいとお願いしたのです。そして、いただいたのが「明日の空に」でした。感動です。また大黒摩季さんは、ＴＶ番組に出演するたびに登別明日中等教育学校の宣伝をしてくれたんです。これもありがたかったです。例えば「さんまのまんま」にも出演されて、ほとんどの時間を登別明日中等教育学校の話をしてくれたこともありました。

さて平成１８年度は開校準備事務室に仕事場が移りました。場所は現地の登別高校の教室の一室です。ご存知のとおり登別明日中等教育学校は登別高校の跡地に建てられております。その開校準備事務室には当初７名が配置されました。教育職が６名、行政職が１名です。後に行政職が１名増員されましたので計８名の体制になりました。１１月以降は、実際の入選業務が中心となりますので、実質的な準備は７～８ヶ月と言ったところでしょうか。最後の勝負でしたね。

この年、あるＴＶ番組で某県の中等教育学校の特番が放映されました。その番組には、自分の夢を持って難関大学合格に向けて努力する子どもとその母親の姿が映し出されていました。ただその番組中では、他の子どもたちとの人間的な触れ合いなどは映し出されてはおりませんでした。人と人の関わりが希薄だったのです。

開校準備事務室の教員がわたしにこう聞いてきました。「リーダー（当時わたしはそう呼ばれていました）、あんな学校をつくるんですか？」と。そこでわたしは、「あくまでも学習指導要領の総則に書かれている調和（バランス）を大事にしようよ」と答えました。生きる力、つまりは高い次元で知徳体のバランスを意識した学校づくりを目指そうということです。どこの学校でも同じだと思いますが、登別明日中等教育学校では、真に将来の本道を担う人材の育成を目指そうと思いました。頭でっかちの子どもに本道の将来が担えるかと言うことです。どちらの学校でもこの知徳体といった三角形を意識した教育活動が行われています。学校によってどこに重点を置くかで三角形の形は変わりますが、どこかがゼロになって三角形が直線になることはないはずです。

この三角形については、先生方にも様々な場面で意識させましたね。登別明日中等教育学校には意欲のある教員がたくさんいましたから、彼らはいろんなことをやりたいとわたしに言ってくるんですよ。しかしわたしは、現状の教育活動で目一杯なんだとよく諭しました。どうしてもそれをやりたいのであれば、何かを減ずる案も持参しなさいとも言いましたね。わたしは、先生方が、そう考えることが学校経営に参画することになると考えていましたから。全体を意識しつつ、部分を見つめる力を持つと言うことです。

つぎに登別明日中等教育学校の特色ある教育活動について触れておきます。国際理解教育がメインですから、学校内では朝からＣＮＮニュースが流れていますし、もちろんＡＬＴも常駐しています。イマージョンプログラムを導入しましたしイングリッシュキャンプは開校以来実施しております。また海外への見学旅行を取り入れるなど随所で国際理解を深める教育活動を行ったわけです。海外からの留学生もどんどん受け入れました。道教委や知事部局にもうちに入れてくれるようお話をしたものです。ですから登別明日中等教育学校の子どもたちは留学生に全く違和感を持ちません。子どもたちの生きる力はすごいものがあります。また体験活動を重視しました。外国への短期ホームステイなんかもそうですね。さらに異年齢交流を積極的に行いました。保護者や地域との交流や部活動などがそれに当てはまります。加えて、子どもたちの育成には、本物に触れる教育が効果的です。先程来説明している海外旅行やそこでのホームステイなどもそれに該当しますが、ある時、本物のオペラ歌手に来校願い、その歌声を披露してもらったのです。歌を聴く前には、オペラなんかと言っていた生徒たちが、聴いた後の感想では、１０人が１０人とも鳥肌が立ったと答

えました。これなどはまさしく本物に触れる教育の成果だと思います。知らないことを教えてやること、実際に体験させることが大切だと思います。こんな学校もなくては駄目だと思うのです。

地域や保護者との連携も様々な場面を通じて行いました。教員の資質向上のために２年に１度は全道レベルの研究会を開催すると決め、平成１９年度に第１回を実施しました。全道から２００名の人たちが集まりましたね。その研究会の司会等の運営や、受付、案内等全てを保護者にやってもらいました。毎年の学校祭もそうです。わたしは、常々、職員にとにかく地域や保護者と関わってくれと言っておりました。学校は、職員だけではなく、地域や保護者と創りあげるものだと考えておりましたから。

さて平成１８年度の開校準備事務室の時に話を戻しますが、この時も学校の広報活動を各地で行うわけですね。この時期でもまだ会場の方々から、なぜ登別に中等教育学校を設置するのか、なぜ札幌や旭川などの大都市部ではないのかといった質問を受けました。しかしわたしは登別のような場所に設置することこそ意味があると考えておりました。若い頃札幌の学校に勤務しておりましたが、札幌のような都市部では地域との関わりはどうしても希薄になってしまいます。地域性が見えて来ないんです。わたしは、道立学校といえども地域なくしては学校は成り立たないものだと考えています。ですから道教委の方針であった地域の中の学校で子どもたちを育てるという趣旨を考えたとき、登別のような地域が適地だと思うのです。

生徒募集に関わってお話をします。開校準備事務室では、広報活動は１０月頃までには終わらせなければなりません。それ以降は進路希望が決定されてしまうからです。その生徒募集の方法ですが、当初は、前期課程と後期課程を同時に３年間募集し、そこで学校を完成させ、その後は前期課程のみを募集するという形を取っておりました。そして、胆振管内では、９・１０・１１月にそれぞれ中学３年生に進路希望調査をするのですが、その１回目の進路希望調査で、後期課程への志望希望者が定員の０．２４倍と報道発表されたのです。３回目なら問題なのですが、これからどのようにでも変わる１回目の調査です。この時に、あるマスコミの方が取材にやってきて、この数字をどう思うかというのです。「まあ、確かに低いですが、まだ１回目の数字ですし、これから変わっていく数字ですよね」と答えたのですが、翌日の全道版に「大山リーダー、ショックを隠せず」と見出しを付けられたのです。全道版の記事でありまして、

当然、北海道教育委員会にも伝わり、当時の高校教育課長から「おい大丈夫か？」と電話が入った次第でありました（笑）。

広報活動は、できることは全てやりました。ＴＶやラジオのコマーシャルを始めとして、胆振管内の小中学校への複数回の訪問や、オープンスクール、学校説明会の開催、その案内を全道の小学６年生と中学３年生全員に配りました。札幌駅前の電光掲示板に広告を流したり全道の私塾総会で講演会を行ったり、また夜に開催される様々な地域でのＰＴＡ研修会にも出席をさせていただいたりもしました。ありとあらゆる機会を利用して広報活動を行いました。もうこれ以上のことはできないだろうと思ったほどです。

最初の前期課程の入選は室蘭栄高校の校舎を間借りして行ったのですが、入選日前日は全道的に大荒れで最悪の日だったんですよ。出願は、結果的には全道各地からあったのですが、中標津空港からの飛行機が飛べず、とりあえず行った釧路空港から１便だけ飛んだ飛行機に乗って間に合った生徒がいたり、新得駅で列車が動かなくなり、代替のバスでかろうじて間に合った生徒がいたりなど、立て続けに奇跡に近いことが起こるんですね。こうしてはらはらひやひやの前期課程最初の入選が無事終了したのです。

生徒が揃い、スタッフが揃い、１年目がスタートしたのです。この年は、全国から１００組５００名の視察者がありました。ここでもいろんなエピソードがあります。また、札幌のマスコミ関係者が訪れ、その感想で、これと全く同じ学校を札幌に建てたとしたら、間違いなく入選倍率は２桁になると言っておりました。よくぞまあ、ここまで来たなと言うのが、そのときのわたしの実感でした。わたしは非常に情に脆いところがあります。小さな学校ですから職員は子どもであり生徒は孫のようなつもりでおりました。酒が好きなものですから職員はよくわたしの家に来て飲みながらいろいろな話をしたものです。楽しい年月でした。

最後に２つだけお話をしていきます。

一つは、わたしの学校づくりの基本的なスタンスです。たくさんあるのですが、例えば、全道に１つしかない中等教育学校ですから特色化を図る観点から、既成概念をどれだけ打破できるのかということも、強く意識して学校づくりを進めましたし、前にお話ししましたが、高い次元でのバランスと本物に触れる教育の実践も強く意識しました。また、自分の子どもを入れたいと思う学校を

創ろうと、スタッフと話して来ました。いろいろあるんですが、レジュメのサブタイトルに「愛あふれる北の大地で夢をもつ人を育む」とあるように、愛とか夢とかを大事にしたいというスタンスを強く持っておりました。

辻会長が３・１１の話を開講式でしておりましたが、それにも関わるのですが、平成２３年９月９日の内外教育に、愛知教育大学の松田学長さんの「東日本大震災と教員魂」というエッセイが載っておりました。ここには被災地域の小学校１年生の担任の先生からの手紙が紹介されていたのです。

「地震直後、低学年の児童を校庭に集め、揺れが収まるのを待って校舎の３階に避難させ、それからその子どもたちとそこへ避難して来た一般の方々と寒い夜をどう過ごし、その後の避難生活において教員はどのような役割を果たしたのか。地域の方々は取り乱し不安だけを口にすることはあったが、その際には教職員は取り乱してはいけない。非常時だからこそ学校は子どもたちに夢を与え希望を語らなければならない。教職員が笑顔を絶やしてはいけない。」と、それは、死力を尽くした教員の対応振りが綴られたものでした。

教育とは、との問い掛けに、「未来への遺産」と答えた方がおります。政治が不安定であり、経済も困難な時期だからこそ、まさに夢だとか希望だとか愛だとかを教員が語り続けなければいけないと思います。学校が語らなければ誰が語るのかということです。

そして、最後に、わたしの妻の話をいたします。このような話をすると言うことは、わたしも年を取ってきたと言うことだと思います。我が家では、職場の話を家庭内ですることはありません。皆さんと同じような一般的な家庭だと思います。ただ、その妻が登別明日中等教育学校に関わり、２度だけ口を開いたことがありました。

１度目は、先ほどお話しした登別明日中等教育学校の志望者数の最初の数字０．２４倍が出た時でした。たまたま札幌の自宅に帰っていて、子どもたち３人と妻とで夕食を摂っていたのです。その記事を見ていた妻が一言「これからなんでしょう」と問いかけてきたのです。わたしは一瞬にして激情し「俺の仕事に口を出すな」と怒鳴り付けました。不安は毎日でした。生徒が集まるのか、特に寄宿舎はどうか、小学校を卒業したばかりの女の子を保護者は手放すだろうか、前・後期２回の入選はうまくいくのか等々、たくさんの不安の中、恐らくあの時がわたし自身のナーバスの最高潮だったと思います。

もう一つの場面です。登別明日中等教育学校での校長職２年間を終え、いよ

いよ新たな赴任地である釧路へ出発するというその前夜、わたしの自宅へ後藤教頭夫妻がお別れの挨拶に来てくれたのです。「いや一校長、４年間楽しく仕事をさせてもらいました。また一緒にやりたいです、機会があれば呼んでください。」などと明るく、たわいのない楽しい感じの話をしていた時でした。妻がやおら跪いて、「後藤教頭先生、長い間主人を支えてくださって本当にありがとうございました。」と涙ながらに挨拶したのです。明るい雰囲気が一変です。恥ずかしい話ですが、このとき、初めて妻も学校づくりをしていたのだと言うことを知りました。

今、色々と考えて見て、わたしが言いたいのは、わたしを初代校長にしてくださり、そのお陰で色々なところから声をかけられるようになったこと自体は大変有り難いことでありますが、初代校長は一人しかなれませんが、学校づくりは一人ではできないと言うことです。家族も含めて、上司、同僚、部下等々様々な方々の支えがあって初めて学校が創られるということを、この場で改めて皆さんと共有したいと思います。

わたしの尊敬する方が話された言葉に「政治、経済は、その時の人々の生活のみを変えるものだが、教育は、人の心、つまり国家そのものを変えるもの、よって最重要課題」というものがあります。その最重要課題に関わることのできる喜びを皆さんと分かち合いたいと思います。

それでは最後に登別明日中等教育学校の校歌を聴いていただいて終わりにいたします。有り難うございました。